

# 萱

2020・3

# 風萱集

亀田虎童子

背の縮むとは不可思議な寒さかな  
水鳥に聞き惚れる声なかりけり  
死ぬまでの退屈しのぎ餅を焼く  
忘れては思ひだしては牡丹の芽  
初詣名前を知らぬ顔見知り

木村 嘉男

寒暮なり燃ゆる落葉松しづもれる  
旧正や日がな嘴太長鳴ける  
私の俺が酔ひだす木瓜の花  
一隅に照らされをりて懐手  
行く人と数へられぬる寒さかな

小島 良子

大振りの雲形定規年迎ふ  
旧道の鈴蘭灯や冬の暮  
切り出せし石の角張る寒早  
山茶花の散りつくしたる地の固さ  
電柱に後側あり冬の暮

松下 道臣

つれあひのふくみ笑ひのうそ寒し  
日の丸に折目のありし文化の日  
抱へこむ額のおもたき秋の暮  
手紙来て眼鏡をさがす秋の暮  
何時もよりひびく靴音十三夜

出牛 進

木枯の吹くや吹かずや空の青  
風呂の蓋取りて冬至と知りにけり  
老いぬれば不思議なことを初夢に  
松納 一日遅れて雨となり  
松取りてさびしき道に戻りけり

# 萱集

進選

寒栢の遠のきゆけば本を閉づ 埼玉 鈴木 愛子

氷下魚焼く部屋くゆらせて旅の果  
達磨市ドロボー橋をわたりゆく  
玄冬の杓あふれしむ夜の海  
昼月の高き八日の初句会

月冴ゆる孤老の萱ここかしこ 東京 ふなかわのりひと

柚子風呂や家族増ゆれば柚子もまた  
光陰のくびれの如き大晦日  
右倣ひ習ひとしたりクリスマス  
授かれる孫の柏手初詣

彷徨うて辻を曲がるや冬もみじ 東京 根來 隆元

住所録くりぬて年を惜しみけり  
短日や廃工場の鉄の屑  
ぬたけたかの鴉声に目覚め寒かりき  
咳払ひして数の子を守りたり

平凡を迷はず積まむ寒椿 東京 武田 未有  
老斑なきてのひらかざし初日受く  
まだ灯る街しろじろと初景色  
へその緒のガ―ゼ揺れゐる初湯かな  
被災傷あるも香るや冬林檎

落雁の乱数のごとおり急ぐ 東京 野村 宏

顎マスク腰曲げ覗く人だから  
石蹴りの歪な丸や冬の朝  
吹き積もる落葉漕ぐかに拾ひ足  
公園のベンチでスマホ小六月

貨車の音消えて再び冬の月 埼玉 新沢 伸夫

知らずとも良きことのあり福寿草  
しぐるるや地藏菩薩の頬の欠  
極月の密かに狂ふ掛時計  
風花となりたる寺の大庇

子供らと一、二、三と大根ぬく 神奈川 田宮 敦子

鳩も鴉も集まる河原冬うらら  
かたづけの座敷に入る冬日かな  
絵本読む父娘の笑顔冬ぬくし  
女正月稲荷の狐細身なり